



## 平和の島唄

ある関係している団体の発行誌が、少し前のことであるが大きく変わった。企画・編集そして装丁まで一変した。事務局長の交代が原因だ。どういうことかは知らぬが本人の弁によれば、マスコミ関係で仕事をしていたものの、本当に自分がやりたいことができずにいたことから退職し、とりあえずここで仕事をすることにしたらしい。そこではどんな仕事をしたかったのかとの私の問いに返ってきた答えが、「例えばNHKで放送していた新日本紀行」だ。それ以来、そのリマスター版である「新日本紀行ふたたび」とその後継番組であろうか「新日本風土記」は録画して見るようにしている▼その「新日本風土記」のテーマ音楽は朝崎郁恵が歌っているが、何か懐かしい不思議と心に迫ってくる唄だ。見るたびに気になっていたが、このほど朝崎のCD「うたばうたゆん」を購入して聴いてみた。朝崎は奄美大島の生まれで、奄美島唄の古形を受け継ぎ、その心を今に伝えているとあるが、その唄は衝撃的としか言いようがない。「島に帰ると海が見たくて、海に行つて歌うんですけどね。昔の記憶に自然が答えるのか、波風が立つんですよ。何度もそれを経験してますけど、最初にまず風が来て、それから波が荒々しくなってくるんですね。そんな時、アア、また答えてくれるなつて思うんです。」まさに「天から舞い降りてくる唄」とでも言おうか▼その奄美では「昔はそれこそ水争い、山争い、土地争いが起こった時には、掛け唄で競い合つて決着を付けたものです。歌詞が出なくなつたら、それで負けなんです。」という。まさに昔の知恵であり、これ以上の平和的な解決方法もない。それほど島唄の存在は大きく重く、「神」とも直結するものだったらしい。島唄をお腹の底から歌つてみたくなつた。

(土着菌)